

《平成20年度 国内短期調査報告》台湾・沖縄の交流に関わる文献調査および打ち合せ

著者	比嘉 祐典
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	44
ページ	307(509) - 308(510)
発行年	2009
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009304/

今回の調査では、三月二五日に台湾到着後、翌二六日より国立台湾大学法学院王教授の研究室において疑問箇所の確認作業を進めた。王教授には授業、会議等大学教員としての日常業務がある中、かなりの時間を割いていただき、作業を進めることができた。しかしながら、作業そのものは引用資料の確認、中国語に翻訳された日本統治時代の資料の原典確認などの基礎的作業に多くの時間を奪われ、遅々たる歩みであった。二七日、二八日、と同様の作業を進め、原著全体の八〇パーセント程度は確認と修正の作業を終えることができた。二九日は日曜日であり、連日の作業の疲れも大分蓄積されていたこともあって、私自身の関心課題である祭祀公業の見学に赴いた。訪問したのは、北投地区所在の祭祀公業「陳懷」である。事前の連絡は入れていなかったが、すでに何度か訪問し、その概要について論文にまとめたこともある祭祀公業であるので、知己の管理人たちに温かく迎えられた。三月末の時期は、ちょうど清明節、すなわち祖先の墓参の時期に当たり、その準備に忙しそうであった。特に、祭祀公業自体が祖先祭祀と結合した一族共存のための集団であるので、外国からの一族の帰国受け入れ準備、あるいは墓参の際の供物の準備など、七人の管理人だけでは足りず、手伝いの人々が一〇人以上参加して、祭祀公業の祠の清掃、飾りつけに余念がなかった。同公業は比較的一族内部の紛争が少ないことで知られているが、それでも墓参費用のすべてを公業の収益である地代と賃貸住宅の収入だけではまかないきれないので、その負担をどうするかで相当議論があったようである。とりわけ、外国からの帰国者は、日本、アメリカ、カナダと世界各地にまたがっており、その旅費補助が昨年までのように半額負担とは行かないということであった。この数年の台湾経済を取

り巻く環境の悪化の影響が見られ、特に昨秋のリーマンショック以降の資金運用収入の落ち込みが大きく影響しているとのことである。また、賃貸収入についても、不動産価格の下落の影響が出て、昨年度よりも減収になったようである。とはいえ、一年に二度の墓参は維持しており、春の墓参は規模の面でも大きいので一族内部からの寄付金も含めて例年通りの事業として行うということであった。

以上の調査を終え、三月三〇日に帰国した。

国内短期調査報告 — 平成二〇年十一月～平成二二年三月

台湾・沖縄の交流に関わる文献調査および打ち合せ

期 間	平成二二年二月二四日～二月二七日	研究員	比 嘉 佑 典
調査地	沖縄 沖縄大学地域研究所、名桜大学総合研究所		

二月二四日（火）午後一四時二五分那覇着。那覇市壺川に所在する沖縄大学地域研究所訪問、調査の打ち合わせを行なった。

二月二五日（水）午前、沖縄大学地域研究所で、沖縄と台湾の地域研究交流に関する資料と、沖縄大学研究プロジェクト「沖縄の地域研究」について聞き取り調査を行なった。当日、本学出身の朝倉輝一准教授（哲学）とも会い意見交換を行なった。

〈報告〉平成二二年度「学術フロンティア」プロジェクト

午後、那覇市の沖縄県庁経済産業課に立ち寄り、台湾と沖縄の自由貿易および琉・台経済文化交流協会の現状について調査を行なった。

二月二六日（木）午前、名護市へ移動。

午後、名桜大学総合研究所訪問。客員研究員大城美樹雄氏と打ち合わせ。総合研究所内講演会で「沖縄の伝統文化の教育と観光化の課題」について講演した。

二月二七日（金）午前中那覇市へ移動。午後の便で東京に帰着。